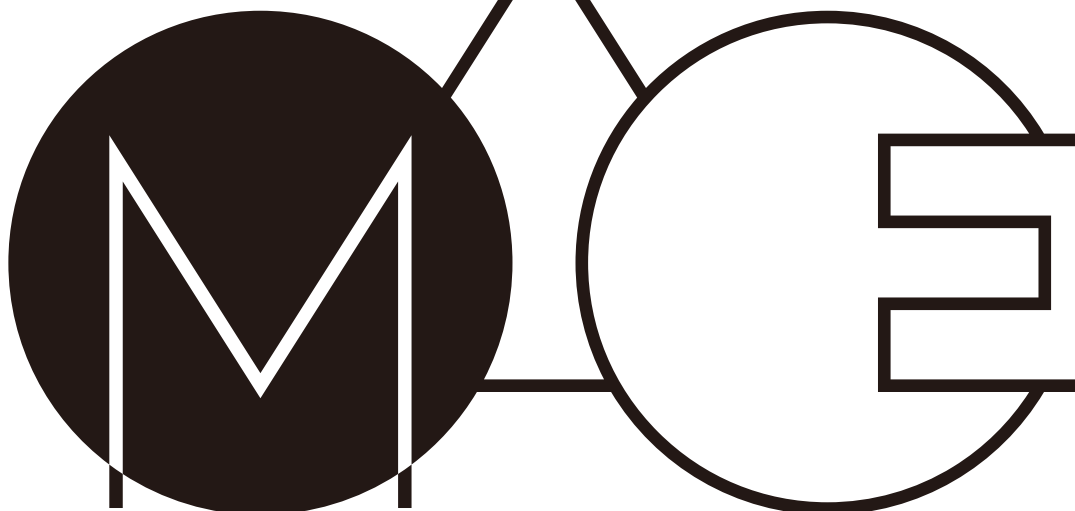


1st.

MIMOCA EYE



第一回
ミモカアイ

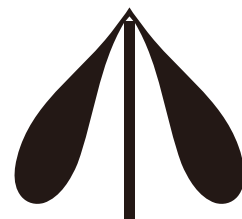
2022年11月20日(日) – 2023年2月26日(日)

主催＝丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、公益財団法人ミモカ美術振興財団

Sun 20 November 2022 – Sun 26 February 2023

Organized by Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art, The MIMOCA Foundation

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館
Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art



丸亀市猪熊弦一郎現代美術館 (MIMOCA) は、1991年、画家、猪熊弦一郎の全面的な協力のもと開館しました。

アートとはその時代の答えであって、アーティストはこの現代をどう表現するのかという責任がある。それがコンテンポラリーアート。未来に向かってアーティストがどういうふうに向き、今にないものを発見していくかっていう、一番大事で一番難しいことの結果を見せる美術館であってほしい — 猪熊弦一郎

猪熊のこの言葉を指針に、当館は活動を続けてまいりました。館名に「現代 (コンテンポラリー)」を入れたのも猪熊の考えであり、現代美術館として当館が担うべき役割のひとつに「若いアーティストの育成・支援」を挙げていました。

これまで当館では、2000年に当時32歳だった中山ダイスケの個展

を開催、その後は、40歳以下のアーティストの個展を「MIMOCA'S EYE」としてシリーズ化し、野口里佳 (2001年)、小金沢健人 (2009年)、フランシス・アップリチャード (2013年) を取り上げてきました。

昨年、開館30周年を迎えたことを機に、若いアーティストへの新たな支援として、35歳以下を対象にした現代美術の公募展「MIMOCA EYE / ミモカアイ」を立ち上げました。本展はその記念すべき1回目となります。5人の選考委員による厳正な審査の結果、294人 (組) の応募のなかから選ばれた17点の入選作がここに並びました。さらにこの17点から、大賞と準大賞を選び、大賞者には副賞として当館での個展開催の機会を提供し、受賞後の更なる飛躍を後押しします。

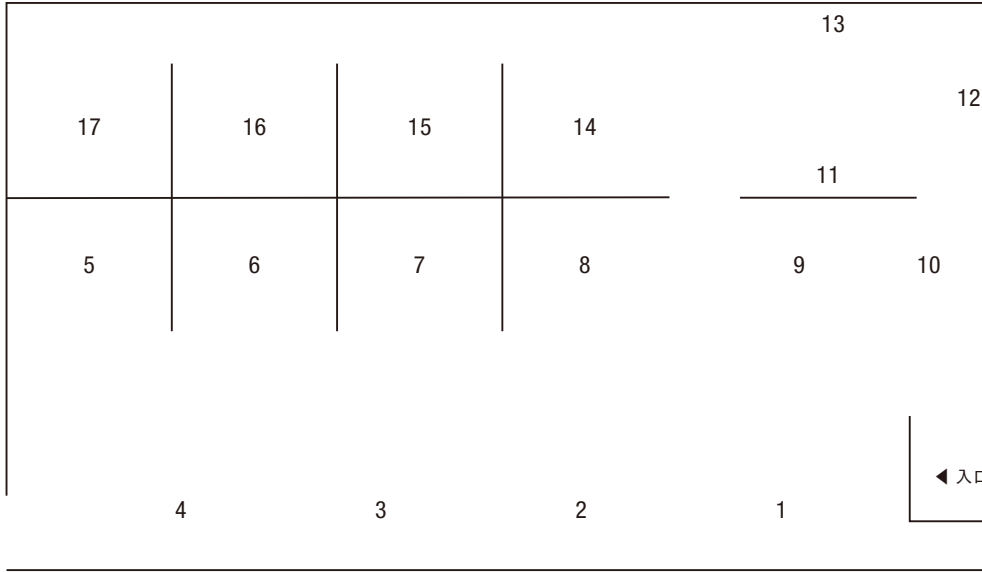
今後「MIMOCA EYE / ミモカアイ」は3年ごとに実施する予定です。この公募展が、猪熊弦一郎が願ったように、これからを担う若いアーティストが時代を捉えながら新しい表現を生み出し、独自の才能をはばたかせる起点となれば幸いです。

●凡例

No.
作家名
Artist
略歴
Profile

作品名
Title
制作年 Date
サイズ Size
技法／素材
スタッフクレジット
Technique / Material
Credits of the production staff

作品コンセプト



1

須崎喜也

Yoshinari Susaki

1987年愛知県生まれ、滋賀県在住
1987 Born in Aichi, Lives and works in Shiga, Japan

托鉢

takuhatsu mode

2022

可変 variable

木版シリコン刷り、油性木版／シリコン、顔料、版木、和紙
woodblock print / mixed media

木版画の立体化を通して、昔の日本文化をテーマに制作をしています。その中でも、表立っていない裏の部分に焦点を当て、普段は陽の当たらない陰が持つ力強さを作品の軸としています。

立体となる展開図を木版画で制作し、版木をシリコンで鑄造する要領で版画を立体にする技法を用いています。版木上の凹凸が反転する為、平面の版画であれば余白となる凹部分の彫り跡が具現化され、インクが乗る凸部分より手前に凹部分が迫り出します。立体化した際に姿を現す「凹部分」と「表立っていない裏の部分」との符号した関係を探っています。作品は「立体となる展開図を刷った木版画」「シリコンで鑄造した立体」「展開図の版木を組み立てた立体」の三点で一つの作品としています。

出品作品「托鉢」は、托鉢を装う偽坊主がモチーフです。路上で行われる托鉢行を、一種のストリートカルチャーとして捉え、ストリートの中にある逆境精神や反骨心を修行ではなく、生きる手段として托鉢を行う偽坊主を通して表現しました。

中山ダイスケ賞

2

原田愛子

Aiko Harada

1987年静岡県生まれ、愛知県在住
1987 Born in Shizuoka, Lives and works in Aichi, Japan

Frankenstein's feet (for all of the sewers)

2022

可変 variable

フリースタイル手芸／ミクストメディア
freestyle handcraft / mixed media

この作品は、以下の身体と裁縫に纏わる3つの実験から成る。

- (1) フランケンシュタインの足
- (2) 針山、あるいは消費されない肉体としてのわたし
- (3) 神の業 (ステッチの練習)

きっかけはサイアナタイプの印画紙で自分の足のフォトグラムを撮ったことだった。露光の環境によって足のイメージが大きく変化し、作業の為に外に出ては他人の足を持ち帰っているように思えた。画像が出来上がる度にバラバラになっていくような自分を統合する為に「理想のわたしの足」を作ろうと試みたが、完璧な姿に近づければ近づけるほど不気味さが増していく。自分に適合できない自分の姿はまるでフランケンシュタインの怪物のようである。私はそれから、自らの擬似的な身体部分を、針と糸を使って作り変え続けている。しかし、いまだに理想の私の姿を受け入れることはできていない。この孤独な旅の中で、いつかフリースタイル手芸の社交場を作りたいという夢ができた。軽自動車の後ろを改造した移動手芸店も開業したい。名前は「暗黒手芸店」にしようと思う。ここでは、誰もが創造主ヴィクター・フランケンシュタインでありその怪物でもある。今のところうまくいく展望はないが、この身体と針と糸さえあればまあどうにかなるだろうという気持ちでいる。

3

中谷優希

Yuuki Nakaya

1996年北海道生まれ、東京都在住

1996 Born in Hokkaido, Lives and works in Tokyo, Japan

シロクマの修復師

Escort Supporter for Polar Bear

2022

可変 variable

パフォーマンス映像 56分・絵画

performance video 56 min, painting

動物園へ行った時、檻の中を一直線に往復し歩き続けるシロクマのミルクちゃんを見たわたしの家族が「あら、ミルクちゃん、あんたみたいでしょ」と言い、私たちは失笑しました。

わたしは精神疾患を患っています。病の症状に呑み込まれた時のわたしに酷似したシロクマのその動きは、常同行動というそうです。この動きは、ストレスからくる動物の心の病、症状のようでした。

病や老いのように、人は誰でも、理性的な言動や行動がとれなくなる可能性を持っています。しかし、常に人は理性的であるというような、デカルト以降の近代的な人間像は、やむを得ない理由であっても、理性的な言動が取れない人を排除・攻撃してしまいます。

また症状やケアの持つ暴力性によって、病の当事者とケアをする人はまるで敵のように分断されてしまうことがあります。しかし「私たち」が対峙すべきは症状であり、私たち自身ではないのです。

「症状のような歩き回る動き」をシロクマとわたしの接続点とし、ケアの実践に必要な、「症状と人となりを分ける」という認識を体現することを目指しました。症状に翻弄されながらも、ケアにおける双方がその時の最善を見つけ、つくってゆく倫理の実践をシロクマとその支援者へ伝えていきたいです。

5

婦木加奈子

Kanako Fuki

1996年兵庫県生まれ、東京都在住

1996 Born in Hyogo, Lives and works in Tokyo, Japan

洗濯物の彫刻

Sculpture of Laundry

2022

可変 variable

コットン布、ナイロン糸、ステンレスパイプ

cotton cloth, nylon thread, stainless steel pipe

わたしは民家の庭やベランダなどで洗濯物が干されている様子を見るのが好きである。干された服や下着は人間の抜け殻のように見え、風にはためく様子は旗のようでもある。

着られている間は着ている主の一番近くでそのプライベートを守り、どこかその主の一部となっている衣服は、脱がれて洗われて干されると、途端にその私性を失いただ布のかたまり、「洗濯物」というものに戻っていく。衣服は、着られている状態、干されている状態、畳まれて仕舞われている状態、さまざま状況に置かれる中で、干されている間だけ「洗濯物」として存在する。

この「洗濯物」のように、「彫刻」を存在させることは出来るだろうか。干されて（設置されて）いる間だけ、「彫刻」として存在するもの。展示が終わると畳まれて、また次に展示される時が来るまで布の状態で仕舞われるもの。「彫刻」「作品」というのは「もの」そのもののことではなく、「もの」が置かれるさまざまな状態があるうちのただの一つに過ぎないように思う。

準大賞

4

西條 茜

Akane Saijo

1989年兵庫県生まれ、京都府在住

1989 Born in Hyogo, Lives and works in Kyoto, Japan

Phantom Body —蜜と泉—

Phantom Body —Nectar and Water—

2022

可変 variable

陶、映像

映像撮影・編集：山根 香

出演：大井卓也、宮木亜菜、森 夕香 音響協力：武田真彦

ceramic, video

film and edit: Kaori Yamane

cast: Takuya Oi, Ana Miyaki, Yuka Mori sound cooperation: Masahiko Takeda

自と他、内と外の境界線はどこにあるのか。

私は身体性に着目した自身の制作において、陶磁器の特徴の一つである内部の空洞に息を吹き込むことで、身体や内臓感覚の延長・拡張を試みてきました。陶製の造形物に創世記さながら息を吹き込む時、身体と造形物は内部の空洞で繋がり、境界があやふやな一つの塊と化すようです。異なる存在として認識している「人とモノ」そして「人と人」の境界線は揺らぎ、また緩やかに繋がり、そこにはかつてマルセル・デュシャンが提唱したアンフラマンズ（超薄）な関係性が生まれます。

日本には古来より器を愛でるという感覚があります。例えば湯飲みを両手で包み、数ミリの厚みを通してじわじわ伝わってくる茶の温かさや素地の質感を掌や唇で感じる。こういった日常の習慣から見ても陶磁器はとても身体性が強いアンフラマンズな素材だと私は考えています。

今作では水辺や花に集う生物のように、多孔性の陶造形にパフォーマンスが集まりその穴に息や声を吹き込みます。作品を通して人々の間にある多様な距離感を可視化するとともに、触覚的な陶芸という素材や人の声や息を媒介にしたプリミティブなコミュニケーションの可能性を再考します。

6

大東 忍

Shinobu Daito

1993年愛知県生まれ、秋田県在住

1993 Born in Aichi, Lives and works in Akita, Japan

夏草を燃やす

Burn the Summer Grass

2022

絵画 painting : 60.6×72.7 cm (×6)、130.3×97 cm (×1)

ジオラマ diorama : 40×45×30 cm

絵画：木炭、刺繍、カンヴァスまたはパネル

映像、ジオラマ

painting: charcoal, embroidery on canvas, panel

video, diorama

野暮ったい住宅街や過疎の村落、営みの跡地や登山でたどり着いた山中といった風景を、歩き、踊り、描いています。

画材は主に木炭を使っています。木炭画は「言葉」のようだと思います。白黒で、色彩による情感や動きが取り除かれることで光と陰による静かな構成となり、言葉に近い、読む絵画になります。

踊りは、ミュージカルの踊りと盆踊りの踊りです。ミュージカルは華やかで祝福的な歓声と共に風景の声を露わにし、盆踊りは輪でありながらも孤独さを併せ持つことから、孤独だからこそ聞こえる風景の声に耳を傾け風景を読み、供養する踊りです。

営みや記憶が痕跡としてはびこる「物語る風景」に向けて「人間」として踊り、身体を澄まし、風景の声を聞きます。語られるのは、踊らざるにはいられない、どうしようもなさを抱えた人間の物語です。

杉戸洋賞

高嶺格賞

7

吉田志穂

Shiho Yoshida

1992年千葉県生まれ、東京都在住
1992 Born in Chiba, Lives and works in Tokyo, Japan

庭になるもの

Niwa ni naru mono

2022

可変 variable

ミクストメディア

mixed media

過去最大の風速と言われていた台風が過ぎた翌日、被害地域に住む家族から何枚か写真が送られてきた。壊れた家や倒壊した物置、倒れた電柱、よく知っている場所にあった様々なものが無くなってしまったらしい。

スマートフォンのモニター越しに見た、見慣れたはずの故郷の悲惨な景色は、ニュースに流れる映像のようにまるで実感を持ってなかった。

被害は甚大で、停電、倒木、土砂崩れなどの影響で長いこと道路が通行止めになり、私が被災した実家に行けたのは、発生から1週間ほど経った後だった。家に帰ると、そこにあったはずの建物が2つほどなくなり、屋根の壊れた部分をブルーシートで補修していた。

目に見えない大きな力が今までそこにあったものを消し、または変えてしまった。

2度と見ることでできない在りし日の景色、歩く事ができなくなってしまった道の先、どこか普遍だと感じていたものが、時間を置くたびに少しずつ形を変えていく。

変わっていく「庭」に写真でしか見ることでできない過去と現在を積み重ねていく、ここから新しい景色を見る。

9

但馬ゆり子

Yuriko Tajima

1997年香川県生まれ、香川県在住
1997 Born in Kagawa, Lives and works in Kagawa, Japan

あなたにとって、わたしにとって。

For you, for me.

2022

158×158×6cm (×1)、50×50×3cm (×3)

多色刷り水彩木版画に加筆

woodblock print, watercolor

目には見えないが存在し、何かに影響を与えた「かたち」に興味がある。

石や貝、ガラスを水辺で採集し、スケッチやドローイングをする中で様々なことを想像する。

さらわれたり、吞まれたり、近くのものどぶつかってきたことで現在の形になり、風や波など周囲で起きる現象の「かたち」が表面に残っていると思う。そして跡として残らなかった「かたち」も同じように残っているのではないだろうか。

今存在している形はいつかなくなっていく。

わたしたちは、そのものの形がなくなるまでの長い物語に少しの間登場しているはずだ。

8

上久保徳子

Noriko Kamikubo

1996年奈良県生まれ、奈良県在住
1996 Born in Nara, Lives and works in Nara, Japan

ずっと傾いたスープ

Forever slanted soup

2022

可変 variable

水性樹脂、セラミック、木材、シリコン、石粉粘土、鉱石、OHPフィルムなど

water-based resin, ceramic, wood, silicone, stone powder clay, ores, OHP film, etc.

主に水性樹脂やセラミックの素材を中心とした立体作品を作っています。様々な素材を使用しますが、素材の特性や性質を生かすのではなく、なるべくそれらの特徴を排除して、現在は別々の素材を1つのもんとして組み合わせることに興味があります。

モチーフの有無は関係なく、「マラカスのような、でも楽器ではない、赤ちゃんのおもちゃ」のように、「○○のような、でも△△ではない、□□。」という、あるものを想起させるがそれではない、鑑賞者が作品を見た後の帰り道やその後の生活などの日常の中で、何らかの気づきや発見が出来るような作品を作り続けていきたいです。

「味の異変に気がついたのなら、日々の変化に気づくことが出来たということ。口で料理を味わうように、目で見えるものを食べることが出来るチャンスだ。」

10

大野陽生

Haruki Ohno

1992年埼玉県生まれ、東京都在住
1992 Born in Saitama, Lives and works in Tokyo, Japan

Sea Monk

2022

可変 variable

塑造、発泡スチレン、壁面補修用粉末パテ、ガーゼ、石膏

mixed media

人の形や動植物の宗教的な図像をモチーフに、「信仰心」というものを造形としてどう表現するかがテーマとなっています。

モチーフの断片から、または複数掛け合わされたイメージから、見たことのない佇まいが作品として現れ始めた時、宗教とは異なる「信仰心」のようなものを感じます。

今回の制作した作品は、鱗状の皮膚を纏った頭部がモチーフとなっています。鱗を持ち合わせる魚や蛇は、神話では信仰の象徴的なアイテムであると同時に、禍々しいものとしても描かれます。それらの鱗状の造形は、感覚的な所作が多分に含まれる形であると同時に、繰り返しの形の中に現れる祈りの集合体のようにも思います。

この作品は発泡スチレンを芯材として切り出し、その上から乾漆像のように布と粉末パテを細かく塗りつけて鱗状の構造により頭部が形作られています。反復作業のパテ造形によって現れる全体は、焼き物の収縮のように、はたまたガラスが冷え固まるかのようにある程度の偶然性によって形作られました。遠隔・仮想空間での精度の高い造形が主流となりつつある今の時代であるからこそ、ものの反復によって生まれる造形に新しい表現を見出そうと考えました。

11

谷口典央

Norio Taniguchi

1988年福岡県生まれ、東京都在住
1988 Born in Fukuoka, Lives and works in Tokyo, Japan

New planet log 2

2022
182×182 cm
油彩／木、木製パネル
oil on wood, panel

人型のタイムトラベラーは自らの形を自在に変化させ、過去から未来、あらゆる場所や時間の中を往来することができる。未だ誰も知らない物、事を知ることがタイムトラベラーの原動力である。

そのタイムトラベラーが目にした場所や物、移動した空間を私は記録する。この作品はタイムトラベラーが発見した、どこか地球に似ているが異なる、新しい惑星に存在する土地の記録である。

モチーフを取り巻く空気、空間の動きを想像しながら彫刻刀で彫り進めていく。一本一本彫っていったその痕跡によって空気の流れが生まれていく。作品の中で用いる色のグラデーションは時間の流れを表している。

私の制作にとって彫る行為というものは、文字を書くことにも、絵を描くことどちらにも似ていると感じる。そのため、"書く"でも"描く"でもない"記す"という言葉が私の感覚に1番近いと現在は考えている。

今回のこの作品は「タイムトラベラーが発見した新しい惑星に存在する土地の記録」であるが、その場所は平穏な場所にしたいと思った。そして私が個人的に考える、祈り、幸運を連想させるモチーフを選び、それを2つ、3つと徐々に派生させ、タイムトラベラーが漂いながら発見し、目にした、新しい惑星に存在する平穏な土地として記した。

12

小穴琴恵

Kotoe Oana

1990年埼玉県生まれ、埼玉県在住
1990 Born in Saitama, Lives and works in Saitama, Japan

壁とはみ出た木

A Wall and Overhanging Tree

2022
162×130.5 cm
油彩／カンヴァス
oil on canvas

描画面と対峙すると一秒が何時間にも感じられる時がある。その逆もある。触れられるようだと思えば、遠すぎて見えない距離を感じることもある。色も線も昨日とは異なっている。部分的に全体的に、作品も私たちも常に変化していく。

“壁とはみ出た木”は、ある街の民家にあった植木を描いた。それは民家の外壁と塀との隙間で、窮屈そうにしながらもよく育っていた。家の角からはみ出た葉の輪郭は周囲の直線とせめぎ合い、夕暮れ時も相まって風景の中で少し異質なものに見えた。

何でもない日常を送るなかで、唐突に何か景色が目に残ることがある。それは日常の隙間に存在していて特別なものでも無いはずなのに、美しかったり面白かったりして描きたいと、絵にしたらどうなるのか見てみたいと、私に思わせる。

しかしいざ描く時に、それはもう手元に無い。私はその変化を受け取り、自身の身体を通して線や色に変え、目の前の画面にふさわしい形で描き留める。出来上がるのは今まで見たことがなかった新しい風景であり、驚きと納得と少しの感動がある。

私の作品は単なる絵画でしかなく、それ以上でも以下でもないが、それで充分なものであってほしいと願う。

13

熊谷亜莉沙

Arisa Kumagai

1991年大阪府生まれ、大阪府在住。
1991 Born in Osaka, Lives and works in Osaka, Japan

あなたは誰だと思う？

Who, do you think? Are you?

2022
2点組 各97×195 cm
set of two, 97×195 cm each
油彩／パネル、カンヴァス
oil on panel, canvas

「私」が「お前」に生まれたかったと思う時「私」は「お前」の人生そのものを偶像にしている。

画面上の他人や、友人、パートナー、家族と言うに近しい存在に対してさえ、或いはだからこそ。

それでも他者の人生を偶像にしてみたい気持ち、その傲慢さとみじめさ、憧憬と嫉妬、暴力性と愛しさ、その感情全てを持ってして、今回の制作のテーマとしている。

モチーフとして、ニューヨークの宗教施設にある彫像と献花を選んだ。シングルベッドサイズ2点組で発表する。シングルベッドサイズは、作家自身の父が孤独死してからライフワークとしているサイズである。

「あなたは誰だと思う？」

「あなただと思う？」

あなたは「あなた」を「誰」だと思う？

教えて

14

石綿優太郎

Yutaro Ishiwata

1996年生まれ、神奈川県出身、京都府在住
Born in 1996, Raised in Kanagawa, Lives and works in Kyoto, Japan

水の音色

Water tone

2022
273×78 cm
ファン、振動スピーカー、水中マイク、木材
テクニカル：堀川裕気
mixed media
technical: Yuki Horikawa

半導体の集積率が年々微細化され、それに伴いコンピューターやスマートフォンは毎年のように数%の機能向上を謳い新しいモデルが発売される。その異様にも思える技術発展に淘汰された電子デバイスのその多くはリサイクルされることなく東南アジア、アフリカ諸国へと輸出され埋め立てられる。私たち自身も当事者な訳だがその現実を認識している人がどれだけいるのかは疑問だ。そのようにして時代の流れからこぼれ落ちた電子廃棄物を再利用しながら、表層的に見えている世界、深層的に存在する現実、その表裏によって成り立っている社会構造、人間の果てしない欲求によって生まれた歪みを縮図として再現する。本作には、瀬戸内の海上に設置されたスマートブイにより収録、センシングされた「水中の音」と「波の揺らぎ」が反映されている。海中と海上で異世界のような差分から、私たちが生きる世界の内界と外界を感じられる場になればと思う。

15

井上裕加里

Yukari Inoue

1991年広島県生まれ、大阪府在住

1991 Born in Hiroshima, Lives and works in Osaka, Japan

Asian women –Japan and Iran–

2022

可変 variable

インスタレーション two channel video 5'30" / 中東限定で販売されているイスラム版のバービー風着せ替え人形“Fulla”、イラン製幼児用おもちゃ、日本とイランの女性専用車のサインを模したフロアサインシール

installation, two channel video 5'30" /

middle east Barbie doll "Fulla", Iranian-made toy for infant, stickers of "Women Only"

本作では、本年6月にイランへ向かい、制作した作品を展示する。

イランでは現在、ヒジャブ(サリー)をきちんと着ていないとして逮捕された女性の死をきっかけに抗議デモが広がり、現在でも各地で抗議行動が続けられている。

私は、その事件が起こる3ヶ月前にイランを訪れた。イランを訪れたきっかけは、中東の女性の地位の問題に関心があったからである。特にイランはイスラム教を重んじている国であり、女性のヒジャブの着用が義務化されている。ヒジャブを着用することはコーランの「目を伏せ、プライベートな部分を守り、飾らず」という教えに従っており、それは敬虔さの象徴でもある。同時に女性たちが性や欲情の対象として見なされることから解放するものである。しかし、ヒジャブの着用義務化の理由には、こうした男性たちからの目線があるという社会が前提にあるとも言える。さらに、イランではバスや電車、タクシーに女性専用車両がある。そこには、女性たちに身を守ることを強制しなければならないほど非安全であり、男性を中心とした家父長制的支配構造がある。しかし、これはイランに限った問題ではなく、この日本にも未だに存在する問題であると私は考える。今回は、イランの女性に着目したが、特定の宗教や地域で起こる特異な問題ではなく、どこにでも潜む問題ではないだろうか。世界の女性の地位の問題について考えたい。

17

ジダーノワ アリーナ

Alina Zhdanova

1992年モスクワ生まれ、京都府在住

1992 Born in Moscow, Lives and works in Kyoto, Japan

記憶の沿岸

Shore of Memory

2022

可変 variable

アニメーション 5分27秒、インスタレーション

animation 5'27", installation

もし、記憶が地球であれば、忘却は海である。海上にでている陸地は想起できる記憶で、海や湖は忘却といえる。想起と忘却の境目である沿岸を、人の記憶を用いて映像の中で表現する。

記憶は時間が進むにつれて変わっていき、消えていく。ある時、記憶の在り方について知った時、とてもあやふやで面白いものだと思った。人の記憶は、本来経験したこととは全然違うことを覚えているのかもしれない。その記憶の曖昧さが、人格を形成するアイデンティティの在り方と重なった。

記憶をモチーフに作品をつくと、その過程で記憶を再構築され、新しい記憶へと書き換わっていくように感じられる。また、その思い出を追求することで、奥に隠れる社会性や共同体といった、それぞれの文化を覗くことができる。他者の記憶を使って物語を考えることは、他者と、その文化を知る一つのきっかけになることができるのではないだろうか。

本作品では、国、人種、宗教といった様々なバックグラウンドを持つ人々にインタビューを行っている。様々な人に出会い、話を聞いて、彼らの子ども時代の記憶を訪ねていく。

16

池添 俊

Shun Ikezoe

1988年香川県生まれ、神奈川県在住

1988 Born in Kagawa, Lives and works in Kanagawa, Japan

声を待つ

Waiting to hear from you

2022

可変 variable

ビデオインスタレーション(スクリーン10分、モニター18分)

音響デザイン: 林 暢彦 協力: 川鍋 達

video installation (screen 10 min., monitor 18 min.)

sound design: Nobuhiko Hayashi cooperation: Tatsushi Kawanabe

2022年7月、生まれ故郷である香川を数年ぶりに訪れた。島遍路である小豆島八十八ヶ所霊場で護摩焚きをし、毎夏来ていた家を外から眺め、旅の末にある人がいる病院に向かった。ところが、感染症対策のため直接会うことは許されず、面会室でタブレットを使いビデオ通話で対面することになった。その人が言葉を発しなくなってから5年が経つ。彼女が世界を閉じたこの数年でわたしたちはバーチャルミーティングが増え、画面という小さな窓に向かって声を出すことが日常の一部になった。その窓越しにわたしは何度か話しかけ、一瞬だけ彼女が笑った気がしたが、目が合うことはなかった。昨年夏、自分の住んでいる街で1人の男性が亡くなった。彼は精神的な病の疑いがあり、長年苦しんでいたようだ。同居する父親は「外に出すと迷惑だから」と男性を玄関に拘束し、その存在を外で話すことはなかった。日本には、精神に障害がある人を法律に基づいて自宅に閉じ込める私宅監置という制度が1950年頃まであった。現在も家庭内の問題は家族の責任という認識が色濃く残るこの社会では、彼女・彼らの声も、家族の声も、家の外にSOSとして発せられるチャンスは少ないのかもしれない。わたしは自分の声を外に出してみようと思う。そして声をかけた後に間をあけて、あなたの返答を待ってみる。

●選考委員

植松由佳

国立国際美術館学芸課長、公益財団法人ミモカ美術振興財団理事

杉戸洋

画家、東京藝術大学美術学部絵画科准教授

高橋瑞木

CHAT (Centre for Heritage, Arts and Textile) エグゼクティブディレクター兼チーフキュレーター

高嶺格

美術作家、多摩美術大学彫刻学科教授

中山ダイスケ

東北芸術工科大学学長、アーティスト、アートディレクター

五十音順・敬称略

